

管内専任布教師による『お題目のつどい』

(昭和六十一年十二月五日 布教師会研修会にて)

『お題目のつどい』次第

第一回	四月二日	顕政寺
第二回	五月三日	妙長寺
第三回	五月二十五日	善住寺
第四回	六月一日	晃永寺
第五回	八月二十八日	玉泉寺
第六回	十月十五日	妙永寺
第七回	十一月十三日	常国寺

(寺の月例会等の後に実施。時間は約二時間。参加者は教師五〜八人、信徒は三十〜七十人)

『お題目のつどい』は、昭和六十二年六月に開催が予定されている中四国教区教研会議(主題——お題目総弘通と信心会活動の新たな展開をめざして)に向けて計画、実施されている。

この実施に伴なうて行なわれた、檀信徒意識調査にも見られたように(昭和六十一年六月十四日管区教研にて報告)、檀信徒が宗教に求めるものと、所属寺院に関わる理由とは、必ずしも一致していない。この傾向を放置しておくならば、檀信徒のこの動向は、これからも新宗教の拡大を促し、伝統教団弱体化の原因となるであろう。

この現状をあらためるためには、伝統教団の在り方を生み出した、かつての幕藩体下における寺檀制度に対する認識が必要であろう。そして今、我々は信仰に基づく僧俗の和合(サンガ)を求めて、お題目総弘通の母体としての寺院

——教団を形成すべき時であろう。『お題目のつどい』は、その試みの一つである。

今回の試みの中で注目されたものが法座である。法座は、新宗教の布教方法の一つとして、早くから組織的に実施されている。顧みるならば、本宗においても法座は、各人各様に行なわれているものと推測され、宗務院によつてその実施はすでに求められてもいたのである。

今回行なわれた法座は、司会者が参加の檀信徒に質問を促し、教師がそれに答えるという形態である。資料にみられる法座の理想には及ばないのであるが、法座において僧俗の対話と交流がこれからも継続されるならば、将来の新しい寺院——教団の形成の可能性をはらむものと思う。

法座における話題を検討してみると

①信仰の意義について（信仰しても苦難がなくならないのは、どうしてであろうか）

②唱題について（但信口唱でよいか。どのように雑念に対処すべきか。新宗教のお題目について。念仏とのちがいについて）——これらの質問によつて、教師自身の信仰の深化と教学の必要性を感じた。

③霊現象について

④葬送儀礼について（たとえば、とりこし初七日忌法要にみられる儀式の簡略化の傾向について）——儀礼としては受容されているが、これまで非合理的と批判されてきた分野である。今日では、この分野についての再検討がこころみられる傾向にあるが、教師は的確な認識と信念にたつて、これらの問題に取りくむ必要がある。

⑤祭祀供養について（仏壇のまつり方、墓相について）

⑥民間信仰について（荒神勧請のこと）——これらに対する適切な処置をしながら、日常的な信仰習俗に関わる人々を、いかに法華経の道に帰一させるかが、教師に課せられている。

⑦ 勤行・行事について（十如是・開経偈の読み方について、塔婆について）—— 日常的な事柄についての知識があい

まいであることに気付かされた。慣習化している行事などについての意義への認識を深めるべきである。

これらの内容を見ると、①②にわずかに窺えることをのぞいては、参加の檀信徒の信仰実践より生ずる質問が少ないことに気付く。信仰が実践されるべきものとして主体的に把握されていないからであると思われる。極論すれば、檀徒であるが未信徒であり、檀徒から信徒へとの展開が要請される所以である。そして、これは我々教師の自覚によるところが大きいのではなからうか。頂門の一針として、西田幾太郎の『現今の宗教について』の一節を挙げておきたい。

今の宗教を罪するものは宗教家なるのみ。彼等の多くは自ら人生問題に撞着して刻苦精励遂に自己の宗教に由り之が解釈を得たるにあらず。宗教伝道をば恰も一職業の如くに考へ之が説教に必要な知識を学得せるのみ。自己に宗教的経歴なく、乃ち能く教祖が真意の所在を洞察し得ず、徒らに死せる形式を尊信して己が宗教の本意となす、かくの如くにして生ける宗教を伝へんと欲す。豈難からずや。